

# Knowledge Report

IX Knowledge Inc. PR MAGAZINE  
Vol.38 AUTUMN 2019

- ① アイエクス・ナレッジ誕生20周年 ご挨拶
- ② あすへの対談 安藤社長が聞く！  
何事もグレーはない、白黒つける決断力  
「絶対にショートするな」のゴルフで女王に  
ゲスト：村口 史子さん  
女子プロゴルファー
- ⑨ [特別企画]ブレイクタイム  
過去の経験や業績を潔く捨てて、  
変身を繰り返すことが、人生を豊かにする  
齋藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

- ⑪ わが社の匠  
トップ・エンジニアの軌跡⑩ 森泉 謙太郎
- ⑬ イベントレポート  
IKI誕生20周年記念パーティを開催！
- ⑮ ユーザーインタビュー  
IKIのサービスが選ばれる“わけ” [24]  
お客さま：株式会社新潟県農協電算センター
- ⑱ [コラム]  
グローバルな波に乗って

[今号の表紙]

秋と言えば、「食欲の秋」ですが、カメラマンにとっては「写真の秋」。特に志賀高原は、紅葉が素晴らしく、蓮池などの池巡りもいいですね。写真は、晩秋ぎりぎりの木戸池。豊かな自然、紅葉に包まれたい方にお薦めです。

【撮影】太田 隆

IKI ナレッジ・レポート vol. 38

令和元年10月1日発行

編集：アイエクス・ナレッジ株式会社

〒108-0022 東京都港区海岸3-22-23 MSCセンタービル

TEL.03-6400-7000(代) URL <https://www.ikic.co.jp>

本文中に掲載されている商品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。

安藤社長が聞く!

何事もグレーはない、白黒をつける決断力

# 「絶対にショートするな」の ゴルフで女王に

ゲスト 村口 史子さん 女子プロゴルファー

1990年にプロテスト合格、翌年初優勝、1999年には年間3勝を挙げて賞金女王に。その後、腰痛の影響で2004年にシード権を獲得しつつも最終戦終了後にツアーから電撃引退。現在は、ゴルフ番組の解説やラウンドリポーター、レッスン番組への出演ほか、講演会や執筆活動など多方面で活躍されている女子プロゴルファー、村口史子さんに、安藤社長がお話を伺いました。

(この対談は、さる7月11日に行いました)



新天皇の即位、改元により、平成の時代が終わり、新たに令和の時代の幕明けとなった2019年、前身2社の経営統合により誕生したアイエックス・ナレッジ株式会社(IKI)は、20周年を迎えました。

お客様のニーズに合わせたシステムを提供し、長く安心してご利用いただけるよう保守・サポートをしていく愚直な事業活動によって、私たちは確固たる信頼を獲得し、「すべてのステークホルダーから選ばれる会社」となることを目指してまいります。

新たなステージへ挑戦し続けるアイエックス・ナレッジを今後ともよろしくご厚意申し上げます。

アイエックス・ナレッジ株式会社  
代表取締役社長

安藤 文男

To the next stage

20<sup>th</sup>  
Anniversary

アイエックス・ナレッジ  
誕生20周年

部活でバレーボールを教えるという夢

安藤：今日はお忙しい中、おいでいただきましてありがとうございます。ゴルフが大好きな私としてはプロゴルファーの方とお話ができるのはうれしい限りです。ゴルフというかスポーツには子どもの頃から親しんでいらしたわけですか。

村口：私は中学生のときにバレーボールを始めました。あまり興味もなかったんですが、背が高かったので(笑)。

高校は何度も誘っていたけど上の先輩と同じ高校でバレーボールを続けてみようと思い習志野高校に行きました。当時、習志野高校はバレーボールの強豪校でもありましたが、スポーツは何でも強かったですね。

安藤：スポーツの強豪校ですよ。

村口：私は身長が166cmありますが、習志野高校には全国から背の高い人たちが集まってきましたので、入学したときには1年生の中でも小さいほうでした。だから、なかなか練習にも参加させてもらえなくて、ボール拾いとボール磨きの日々が続きました。先輩の指導も厳しく、きつい上下関係のルールもあって、いやだなあと思っていました。たぶんこの分だとレギュラーになれないから、夏休みまでがんばって、それで見込みがないと思ったらもうやめようかなと。結局、バレーボール部を退部しました。



あん どう 安藤 文男 Fumio Ando  
アイエックス・ナレッジ(株)代表取締役社長

そこからはもうプラプラする日々でした。高校入学当初は、バレーボールを続けて大学に進学し学校の先生になって部活でバレーボールを教えるという夢がありました。でも、その夢は退部と同時に消えてしまいました。

デスクワークばかりの日々がゴルフへのやる気に

村口：バレーボール部を退部後、新たに何か目標を見つけなければとずーと焦って探しました。いまと違って、当時は気になったことをネットで検索して情報を得るといったことができませんでした。

安藤：そうですね。

村口：大学進学以外の選択肢といえば美容師さんやヘアメイク、服飾関係の専門

血液型に助けられプロゴルファーへの道に

村口：当時通った近所の練習場には、レッスンプロが4〜5名いらっしゃいましたが、単に土曜日の夕方担当の指導者ということで選んだ先生が、ゆくゆくは私の師匠になる郡司洋プロでした。

安藤：千葉カントリークラブ創設以来、50年にわたって所属ヘッドプロとして活躍した方ですね。

村口：はい。でも、そういうこともそのときはぜんぜん分からなくて(笑)。そこで最初は週に1回習いました。当時、私より5歳くらい年上の女性がその練習場の灰皿などの掃除をしながら練習をしていました。あの人は何をしているんだろうと思って

学校に行くなどでしたが、それらにはぜんぜん興味がありません。では、企業に就職しようと思いましたが、とりあえずは給料のいい会社に行こうと(笑)。

安藤：それはホンネですね(笑)。

村口：私は簡単に就職できると思っていましたが、なかなか就職試験に受からない。どうしようかと思ったときに、友達の伯父さんが働いている会社に就職することができました。そこでは総務部に配属されましたが、スポーツばかりしていた自分に、デスクワークは合わないということに最初から気づいていました。そんなときにゴルフと出会いました。

安藤：それは、どういう出会いだったのですか。

村口：以前から、ゴルフをやってみたら?と知り合いに勧められていたんです。当時、私はゴルフにはぜんぜん興味がありませんでしたが、プロを目指しているんだよ、と聞くと、プロを目指しているんだよ、と言われました。スポーツ全般に言えることですが、小さい頃から始めないとプロにはなれないと思います。でも、ゴルフってこんなに遅くから始めてもプロになれるんだ、自分にも可能性がある、とその人を見て思っ、もういきなり、私もプロになる、と思っただけです。単純ですよ(笑)。

安藤：その即断の裏にはもともと運動が好きだったということがあったんですね。

村口：それもそうですが、小さい頃から自分で何かをしたいというのはずっと思っていて、それでゴルフのプロを目指すことになったんだと思います。

それから、郡司プロに、プロになりたいんです、とすぐに言いました。ところが、まだコースも回ったこともないしルールも知らない、始めてまだ数カ月で何を言っているんだ、この子は?と思われて、何度も断られました。プロゴルファーというのは大変だよ、早くお嫁に行ったほうがいいよ、とも言われました(笑)。

安藤：(笑)。

村口：私はめげずに、プロになりたいんです、と何度も言い続けました。そのうちに練習場で先生に、血液型は何型だ?と聞かれて、B型、と言いました。安藤さんは、血液型は何型ですか。

安藤：私はO型です。

村口：O型ですか。残念。

安藤：O型で残念と言われたのは初めてです。



GUEST PROFILE  
むらぐち ふみこ 村口 史子 Fumiko Muraguchi

1990年プロテスト合格、1999年賞金女王、LPGAツアー優勝7回の女子プロゴルファー。2004年にシード権を獲得しつづ最終戦終了後に電撃引退。現在は、ゴルフ解説やラウンドリポーター、レッスン番組への出演、執筆・講演活動など多方面で活躍。

した。父はゴルフが大好きで、ゴルフの試合をテレビで見せていました。父親にいろいろとゴルフの説明してもらいましたが、ゴルフを知らない私にはチンプンカンプンでした。でも、デスクワークばかりの日々に何か運動がしたいなあと思っていたときに、勧められていたこともあってか、ある日突然やってみる気になったんですね。そこから一人でゴルフショップに行くと、店員さんに言われるままに、5番と7番のアイアンとピッチングウェッジを買い、ゴルフ練習場に行きました。スポーツには自信があったのでやる気満々で打ったら、見事、空振り(笑)。びっくりしました。自分の中で、ゴルフって何?って。安藤：止まっているボールですね。

村口：ここに、動かないのであるのに(笑)。それでちょっと習ってみようかなと思ひ、土曜日の夕方に練習することにしたんです。

村口…B型はプロゴルファーの方で言えば、ジャンボ尾崎(尾崎将司)さん、青木功さん、岡本綾子さんなどです。当時はちょうど大活躍しているプロの方たちがB型ということで、じゃあ、うちに来るか、と言っていただきました。私は勤めていた会社を辞めて1985年の9月から千葉カントリークラブの研修生生活に入りました。

**師匠からもらった  
ありがたい言葉**

安藤…そこからプロを目指すということですが、プロになるには努力は当然必要で、それにプラスして才能がないとなかなか難しいと思います。性格も、負けず嫌いということが必須ですか。

村口…ええ。女子プロゴルファーで気が弱い人はいないと思います。当時、たまたま千葉カントリークラブには女子の研修生がいまませんでしたので、私はいつも男子の研修生と一緒にバックティーを回らせていただきました。距離が長くなる分、能力的に飛距離が届かないこともしょっちゅうでしたね。

安藤…そうでしょうか。  
村口…もちろんハンディをもらって、先輩の男子研修生と勝負をします。そうなる飛距離ではないかもしれませんが、どんなに長いパーパットでも寄せて入れて負けないようにしなければいけない。そういった練習

けど、と言われました。優勝なんてすぐにできるもんじゃないんだと心の中では思いながらも、がんばりますと(笑)。毎週それがプレッシャーになってきましたね。  
安藤…そのときに予選落ちはなかったんですか。

村口…あまりなかったですね。けっこうバスト10にも入っていました。

ラッキーだったのは、その年はスケジュールに余裕があったことですね。当時着ていたゴルフウェアブランドの社長から、アメリカのオーガスタで開催されるメジャー選手権の「マスターズ・トーナメント」に誘っていただいていたに行きました。

安藤…それはすごい。  
村口…そのマスターズを見ているときに、メジャー大会で3勝しているペイン・スチュアートが11番ホールのパー4でボーンとききなり池に入れてしまったんです。こんなすごい選手でもこういうことが起きるんだというのを見て、私が池に入れたくらいで怒るなんておこがましいなと思いました。それからはミスをして怒らないでやろうと思えるようになりました。その経験もプラスになりましたね。

安藤…怒りっぱいんですか。  
村口…いくら調子がよくても、試合になると何が起るかわからないじゃないですか。ギャラリーの人たちは、これくらいのパーパットだったら俺でも入るよ、とよく言っていますね。そうすると、何言っているんだよ、これが難しいんだよ、と私はラ

も後々になって生きてきたと思います。

安藤…粘り強く寄せてパーを取って、ということですね。パターは得意ですか。  
村口…自分でパターが得意だと思ったことはあまりありませんが、周りからはパットが上手いと言われます。先生からも絶対にシヨートするなと言われていましたので。  
安藤…きつと才能の部分がそこなんでしょうね。

村口…先生に最初からそう言ってもらえたのもありがたかったですね。ですからプロになったときもそれほど距離に不安もなくガンガン打っていました。それが自分の中では当たり前でプロ生活の中でのけっこう大きい部分になりましたね。

**オーガスタで得た教訓**

安藤…プロになってからの初優勝は何歳のときですか。

村口…プロテストに合格したのが1990年で、23歳のときでした。初優勝は翌年の91年です。「サントリーレディースオープン」というタイトルです。

安藤…大きいトーナメントですね。  
村口…ええ。でも、優勝する前の週まで6試合連続で予選落ちだったんです(笑)。  
安藤…あつからかと言いますね。

村口…私はプロに合格してすぐにツアーでウインドリポーターをしていて心の中で言うています(笑)。どんなプロでも外すんじゃないかと常に思っていますので、怒りっぱいというかヒリヒリはしていましたね。  
安藤…最近では、怒りを抑えるアンガーマネジメントが注目されています。

村口…自分をコントロールする方法はいろいろありますね。ゴルフは気持ちの持ちようというところが特に大事だというのはウインドリポーターとして外から見ても思っています。  
安藤…そうしたこともあって、賞金女王になられた年の後半はかなり冷静にプレーできたということですね。

村口…そうですね。初めて年間3勝しました。そのあと私は10月くらいに腰痛になってしまいました。その頃には2位との差がググッと縮まってきていましたね。私は腰痛が出ているのに試合を休めない、出ないといけない、というような感じでした。最終的には最終戦で50万円くらいの差でした。

**グレーはない、  
白黒をつける決断力**

安藤…その後、シード権を残したまま引退されましたね。

村口…はい。腰痛がひどくなって試合には出ているけれどもただ歩いているだけというような状態が続いていました。自分とし

ビューしましたが、当時、私の周りに女子プロの方はそれほどいませんでした。ですから試合に出ている先輩も知り合いもいませんので常に一人で行動していました。いまのように車のナビも携帯電話もありませんので、車で出かけるときは行く前に必ず地図をポケットに入れて、常に目印になる看板を見落とさないようにしていました。ホテルも自分で予約しますが、いまみたいにネットで事前に確認できるわけでもないで、とりあえず予約して、どんなホテルだろう？という感じでした。もう試合云々というよりも、そんな生活にけっこう疲れてしまっていたんですね。

安藤…そのような状況でも賞金女王になられたわけですが、それはプロになってから何年目くらいですか。

村口…ちょうど10年くらい経っていましたね。33歳のときでした。1999年ですが、その年はシーズンが始まる前からレーシングをしてすごく体の動きがよいと感じていました。ツアー開幕戦でミスしても冷静に対処ができていたのを覚えています。5月にその年の初優勝を飾り、翌週も優勝しました。

安藤…2週連続の優勝ですね。  
村口…私はいつも1年間の目標を決めないんです。でも2週連続して優勝すると、賞金女王は？と記者の方々に急に聞かれるようになって。それから6月7月に勝てないと、最近では優勝できていません

ては出ないほうが不安でしたので、けっこう無理をしてしまいました。特に翌年は、前年の賞金女王なのでいろいろなコメントを休むわけにはいかなかったんです。女子は同じ大会を2年連続して休むと100万円の罰金が課せられます。

安藤…厳しいですね。  
村口…すごく厳しいんですよ。ですからが



ばって出場していましたが、ぜんぜん腰痛が治りません。そういつているあたりから宮里藍さんや横峯さんらがプロとして登場してきました。私は試合に出ながらも、ゴルフをやめたら何をしたらいいんだろう、これからどうしたらいいんだろうと悩みましたが、これまでもお話ししてきたように、何に対しても白黒をつけるのが私の性格です。グレイはないんです(笑)。私はどちらかというと距離が出ないので気持ちでやってきたタイプでしたので、いまの状態ではゴルフを続けるのは無理だな、2004年の1年間がんばってどのような結果だろうとこの1年限りでやめようかと決めました。

安藤：それも1つの決断ですね。

村口：私は以前にもゴルフをやめようかとしようかと悩んだときがありました。実は、1994年に一度シード落ちをしているんです。そのときも、いい成績を出さなくちゃいけないと思ってがんばったんですが、結局はシード権を持たないプロやアマチュアが、翌年のツアー出場のシード権をかけて争うQ-T(Qualifying-Tournament)で権利を取って95年にはまたシードに戻りました。

私は95年に母を亡くし、2003年に今度は父が亡くなりました。そういつた意味では親のためにプロを続けることもないし、もう自分のことだけを考えたらいいかなという気持ちにもなり、2004年の

最終戦終了後に引退しました。まあ、引退までにはいろいろなことがありましたね。

### 伝えることは難しい いまでも毎回反省

安藤：それから現在に至るわけですが、いまはゴルフトーナメントの解説やラウンドリポーターなどで活躍されています。競技者とは全く違う分野だと思えます。脳の使い方がぜんぜん違うんじゃないですか。

村口：そうですね。私は引退したときには1年間何もしてませんでした。引退して1年後くらいに、ハワイで開催される全米女子プロゴルフの公式戦の解説の仕事を受けることになりました。

現役のときから私は終わった試合の話をするのはそれほど好きではありませんでした。それなのに、これからは他人のゴルフについて話をしなければならぬ。自分でできるのかな?と思いましたが、しかも、日本の選手だけではなくてアメリカの選手も出ている大会です。まあ1回やってみようということになりました。そのとき、テレビのプロデューサーから、リポーターは話を振られたときに、考える時間が欲しいので、そうですね、言うことが多くいんですが、そういつている間にも何かを話せるので、そうですね、をいれないようにしてくださいと注意されました。

いますが、私たちもがんばっているんだよ、とひそかに思っています(笑)。レッスンに関しては自分たちもいろいろな人を見て多くの経験をしてきていますので、現役選手にはない蓄積があります。私たちレジェンズ世代もゴルフの底辺拡大に貢献していると思います。

### 五輪で112年ぶりの ゴルフ復活に感動

安藤：話は変わりますが、週末の過ぎし方を伺いたいと思います。空手をなさっているそうですね。

村口：夫が空手の道場を経営していますので、練習に行けるときには行っています。あとは3カも習っています。それから老犬がいますので、その世話をしています。

空手は体幹がしっかりしていないとダメですね。蹴るときに軸がぶれてはいけないので、空手で体幹が鍛えられたことはゴルフにもすごく役立っています。

また、引退してからママさんバレーに入ることがあります。ママさんバレーも楽しいですよ。でも、バレーボールをして指を骨折したらゴルフにも影響がでると思ってママさんバレーには行けなくなってしまいました。安藤：確かにバレーボールは突き指などがありますからね。

村口：あと、自転車も買いました。靴をペダルにはめるタイプのもので、最初にツー

た。コンパクトに話をしてください、たくさん話をしてください、と。その他にもいろいろとアドバイスをしていたので多くのことを教わりましたのでありがたいと思っています。いまでも、そうですね、つい言ってしまうんですが、ゴルフのプレーとは違った難しさがあると思えましたね。

安藤：伝えるということは、なかなか難しいですね。

村口：解説やラウンドリポーターをもつ10年以上やらせていただいています。難しいなあと思います。いまでも毎回反省ですよ。

### レジェンズ世代も ゴルフの底辺拡大に貢献

安藤：ふだん、ゴルフはプレーされていますか。

村口：しています。45歳以上の女子プロゴルフアーツを対象としたシニアトーナメントのレジェンズツアーが年間4試合ありますので、それにも出ています。ですから週に1回はプレーについてトレーニングもしています。

安藤：素晴らしい。ゴルフから人生観のよいなものを学ぶことがけっこう多いように思います。ゴルフから何かを得られたという経験はありますか。

村口：現役のときはもう必死で、自分の生活のためにゴルフをしているという感じでした。いまのほうがいいが、ゴルフがすごくリングに行ったときにペダルから靴をはかせないまま3回くらい転んでしまつて、これは危ないなと思いました。

それから、乗馬クラブにも行ったことがあります。そのときには乗馬ズボンを買いました。でも、それもやめてしまいました。馬の世話をしなければいけなくて、こんなに馬の世話をするくらいだったら自分の家の犬の世話をしたほうがいいわと思って(笑)。

安藤：スポーツ系の趣味がたくさんありますね。

村口：実は、何も分らないですが、油絵をやってみたいなあと思っています。また道具から揃えるから大変です。そういうところにお金ばかり使っています(笑)。

安藤：最後に、来年の東京オリンピックに對する思いや期待を聞かせてください。

村口：ゴルフは1900年のパリオリンピックと1904年のセントルイスオリンピックの2回開催されたあと競技から外れていました。ですから2016年のリオデジャネイロオリンピックで112年ぶりにゴルフが復活したときには、スポーツとして認められたんだという感動がありました。

日本の芝はアメリカやヨーロッパと違って、日本人選手には有利な部分があると思います。東京オリンピックでは、日本人選手にぜひメダルを取っていただきたいですね。

安藤：ぜひがんばってもらいたいですね。今日はゴルフのお話をたくさんしていただきまして本当にありがとうございました。

安藤：我々の業界の健保組合では、レジェンズツアーに出ていらっしゃる方々にレッスンをお願いして来ていただいています。若い方たちより熱心に教えていただけているということがあるように思います。

村口：そうですね。いまの女子ツアーはすごい人気で若い人たちの活躍が注目されて



# ブレイクタイム BREAK TIME

特別企画

いま、社会が、ビジネスが、生活が、私たちを取り巻く環境が、日々刻々と急激に変化しています。その変化のスピードは凄まじく、時として自分の立ち位置がわからなくなることがあるのではないのでしょうか。そうした時代に生きる私たちの「いま」と「これから」を考える」をテーマにした特別企画「ブレイクタイム」。仕事や勉強の合間にお読みください。

## 過去の経験や業績を潔く捨てて、 変身を繰り返すことが、人生を豊かにする

齋藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

【執筆者プロフィール】



**齋藤 昌義**  
1982年日本アイ・ビー・エム入社。営業や新規事業開発などを担当。1995年同社を退職、ネットコマース株式会社を設立し現職。多くのIT・通信関連企業新規事業の立ち上げをプロデュースするほか、講演、雑誌、Webメディア等の記事寄稿多数。著書に「システムインテグレーション崩壊」(2014)、「システムインテグレーション再生の戦略」(2016)、「【図解】コレ1枚でわかる最新ITトレンド[増強改訂版]」(2017)など。

フランスの小説家・ポール・ブルージェは、次のような言葉を書き残している

「自分の考えたとおりに生きなければならぬ。そうでないと、自分が生きたとおりに考えてしまう。」

日々の雑事に流され、気がつけばそこにそんな自分がいる。それを自分の人生であると受け入れるしかなくなってしまう。そんな人生で、あなたは満足できるだろうか。

時代の変化は加速度を増し、ほんの少し前の常識は、あっという間に陳腐化する。そんな時代に学び続けることは、これまでも増して大切になっている。A-1がどれほど進化しても、「自分の考えたとおりの生き方」を選ぶのは、人間にしかできないことだからだ。与えられたことを、何の疑問をいなくことなく、ただそれに従い、黙々と時間を消費するだけのことであれば、A-1の方が、遥かに要領が良く効率もいい。そんなA-1に置き換えられないためには、ものごとを知り、広い視野に立って、「自分の考えたとおりの生き方」を選べる能力を身に付けるしかない。学びとは、そのために欠かすことのできない、エネルギー源となる。

「一人前」の先にあるのが「プロ」の段階だ。「プロ」の人たちは、例えば「一人前」になっても、つねに自分の不足や未熟を見つけ出し、「意識」して学び続ける人たちだ。学び続けることで、世の中の常識や変化を知り、常に不足や未熟を意識し続けようとしている。こういう人たちは、会社にも自分にも批判的である。だからといって会社の悪口を公然と言ったり、評論家のように捉え、見つけ出した課題を自分に与えられた職責の範囲で、あるいはそれを拡張して解決しようとしてみる。そうやって、企業や組織の改革を推し進めてゆく。例えば文句は言っても行動が伴っているからその人の文句は人の心を動かす力を持っている。また、こういう人は、社外に広く人の繋がりを持っている。この繋がりが、新しい気づきを常に生み出し、広い視野を与える。そして、自分自身を世の中の基準で客観的、冷静に評価できる謙虚さを与える。それが、不足感や未熟感を常に生みだし、学ぶことへのモチベーション

ないだろうか?」と確かめ、自分の判断や行動を修正し、うまくやり方を見つけてゆく。「意識」していると、自分の「できない」や「未熟」を率直に受け入れ、学ぶという態度を生み出す。できる人に訊ね、本を読み、情報を収集し、対処の方法を考え、行動に変えてゆく。そうやって、自分の能力を磨いてゆく。

この段階が終われば、「一人前」の段階となる。「無意識」にルーチンワークをこなせる段階だ。場数を増やしてゆくことで、応用の範囲が広がってゆく。意識しなくても仕事ができるようになる。つぎの新しいことを意識する余裕が生まれる。そうやって、新たな意識の対象を増やし、「一人前」は熟練の度を極めてゆく。ただ、残念なことに、「一人前」の称号が与えられると、新しいことを学ぶという意欲をなくしてしまふ人がいる。仕事の成果に結びつかないことを学ぶのは、時間の無駄と考えるからだ。仕事の要領も良くなり、「一人前」のままでも過ごす方が、社内からは評価されるので、新しいことを学ぶというモチベーションは生まれにくい。そして、そのまま歳を重ねてゆく人もいる。こういう人たちは、既存の仕事のルーチンワークやその応用はできて新しいことや例外的なことに対処できない。変化の激しい時代になると、既存の仕事がどんどんなくなってしまうので、やがて「一人前」では仕事ができなくなってしまう。そして、「役に立たないおじさん」や「働かないおじさん」になってゆく。給与が高い割には業績や成果があがらない。社内のルーチンワークの範囲を超えないので、社会的な価値も低く、外に出ても通用しない。そのため、自分のやってきたことでのみ熟練を極め「一人前」としてやってきた人たちは、世の中の変化を受け入れることができず、時に抵抗を示す。たとえば言葉では、「変わらなくてはいけない」と言っても、どのように変わればいいのかを学んでいないので、行動を起こさ

### 人の繋がりが新しい気づきと 広い視野を与える

そんな人生の学びには、3つの段階がある。

まずは、「素人」の段階だ。仕事をどのようにこなせばいいかわからない段階であり、入社して間がない若手の多くはここに居る。仕事の現場の8割はルーチンワークでなっている。これができないと仕事にはならないので、まわりからは常にプレッシャーがかかる。自分もまわりも思っているので、なんとか必死で知識やスキルを身に付けようとする。そうやって2〜3年も過ごせば、一通りのことはこなせるようになる。ルーチンワークができるようになるまでは、作業のひとつひとつを「意識」しながら、「このやり方で間違っ

### 社会でどう評価されるかにこそ 価値がある

過去のやり方があっという間に変わってしまう時代にあつては、実績や業務スキル、経験があるといった「過去」で、世間は評価しない。だから、過去の経験や業績に甘んじることなく、いや、むしろそれを潔く捨てて、常にいまの時代にふさわしい自分であろうと変化し続ける人を世間は高く評価する。つまり、何が起るか分からない未来に、常に適応し、変身できる人材こそ、世間は求めている。会社でどう評価されるかなど、小さなことだ。社会でどう評価されるかにこそ価値がある。だからこそ、学び続け、その時代にふさわしい自分に、変身し続けることが、あなたの人生を豊かにする。

いまの自分に問いかけて欲しい。

- 「一人前」に満足して「学び止め」はしていないだろうか?
- 過去の経験や実績に満足してはいないだろうか?
- 広く社外に人的なネットワークを持っているだろうか?

この問いかけに、このままではまずいと思うのなら、何かを始めてみるのだ。決心してから行動するというのは、うまくいかない典型だ。まずは、行動を起こすことだ。行動を起こせば、結果として決心が固まる。この順番を間違えてはいけない。例えば、その行動が小さなものであっても、やがては大きな果実を実らせる。それが、あなたが変身するための財産となってゆく。

変化はその加速度をさらに増していくだろう。そうなれば、過去の経験や実績はあつという間に価値を失ってしまふ。だから、いつでも変身できる財産を積み上げてゆくしかないのだ。

<b>プロ</b> 新しいことを創り出す。 新しいことや例外的なことに 対処できる。	新しいことや難しいことを任せられる段階 自社だけではなく、世の中についての常識 に精通し、変化に敏感で、未来を先読みし ている。社内外に豊富な人脈を持っている。
<b>一人前</b> ルーチン・ワークの手順を 意識しなくてもこなせる段階	意識せずに仕事ができる段階 経験を重ねることで、 いろいろな仕事のパターンを覚え 既存の仕事の延長であれば、 即座に対応できる。
<b>素人</b> ルーチン・ワークの手順を 意識しなければこなせない段階	要領よく仕事ができる段階 ひとつひとつ丁寧な仕事をする ことで、要領や仕事のコツ、ビジネスに必要な 基本的な常識を学んで行く。



わが社の

トップ・エンジニアの軌跡 ⑬

「しっかりとモノシステムづくりと高品質のサービス」を掲げ、「選ばれる会社」を目指すアイサクスナレッジ（IKI）。この強気フレーズの裏付けは、他ならぬ人材にあります。そうした人材群をリードしてきた「IKIの現場の顔」トッペンシニア：今回の「わが社の匠」は、Javaのスペシャリストから、さまざまなお客様のデジタルトランスフォーメーション（DX）の実現に対応する技術者へ、新たな目標を掲げて歩みを進める匠、森泉謙太郎です。（編集部／本文敬称略）

ITへの興味・関心を意識したのは30年ほど前、森泉が中学生の頃。漠然と「パソコンを使った仕事がいい」と思い、やがてJavaのスペシャリストに。そして現在、今後進展していくお客様のDXの実現に対応していくための活動に取り組んでいる。そんな森泉が考えるこれからの匠像とは。

### 「パソコンを使った仕事がいい」

パソコンに詳しい叔父がいた。父親がパソコンを持っていた。自身が中学生だった30年ほど前、身近にそんな環境があったことが、「パソコンを使った仕事がいい」と思いつきかけた。

中学時代にそんな夢を抱いた森泉だが、実は、高校を1年で中退している。中退後、しばらく酒屋でアルバイトをしていたが、その働きを認められ社員にならないかと誘われた時、ふと「パソコンを使った仕事がいい」という中学時代の夢が蘇った。その目標に向かって就職を断り、大学へ行くために一念発起。大学入学資格検定（現高等学校卒業程度認定試験）で受験資格を得て、大学へと進んだ。入学したのは商学部経営情報学科。遠回りをしてきただけに結果を出すことが重要で、ハードルの高い理系ではなく、文系の中でも情報を扱いパソコンを学べる学科を選んだ。そこで初めてVB6（Visual Basic 6.0）を使ったプログラミングを経

ワークばかりでなく、業務システムの開発も経験した。短期で小規模な案件のリーダーを任せられることが多く、開発の上流から下流まで繰り返し携わることで知見を得たり、勉強の成果を試すことができた。

さまざまな案件に携わる中で、分からないの状況に合わせて、何らかの自分なりの「気付き」を導き出してきたという。そうやって、自身の強みであるJavaの技術力に磨きをかけてきた。

そんな森泉の仕事に対するポリシーは「信用を積み重ねることだ。社内外問わず、信用を積み重ねることで面白い仕事に出会えるし、トラブルの時にも何かとサポートしてもらえる。」

「案件に携わっているその時々で成功を感じることはないが、お客様と長く付き合っていることが、自身の成功体験だ」と言う森泉。

10年ほど前、当時の最先端技術を駆使したサービスを提供していたお客様の現場で、フレームワークの構築に携わった。そのお客様との付き合いは今も続いているそうだが、最初の案件を次の案件へさらにその次の案件へと繋げて今に至っている。まさに、お客様の信用を積み重ねてきた結果にほかならない。

### 「大きな失敗が匠の骨格の一部に」

森泉にも記憶に残る大きな失敗がある。入社3年目。携わった金融業界での開発案件がうまくいき、翌年、大きなシステム統合案件に参加した。そこでの開発業務は、エンドユーザーであるお客様との間に「プロジェクト管理を担う企業が入る体制で行われたのだが、そのプロジェクト管理が非常に厳しかった。森泉にとって今こそ「当たり前」と言えることが、当時は「当たり前」ではなかった。「MBO（Work Breakdown Structure）も作

## Javaスペシャリストからデジタルトランスフォーメーション時代の技術者へ

エンタープライズ事業部 もりいずみけんたろう 森泉 謙太郎



験する。しかし、当時のプログラミングの授業では、言われた通りのことをやる程度の内容だったという。

### 「コツコツと地道に理解を深めて」

森泉が新人の頃、社内ではJavaの研修が本格的に立ち上げられようとしていた。当時、Javaの教えを受けた今の上司からいろいろなことを叩き込まれたという。森泉をよく知るその上司は、当時は振り返り「プログラミングに関する知識がほぼゼロに近く最初は理解に時間が掛かっていたが、コツコツと地道に努力する性格で徐々に理解を深めていた」と話す。

このJavaとの出会いが、森泉にとってひとつのターニングポイントになった。以来、これまで携わってきた主な業務はJavaのWebシステム開発。入社後、数年間は、プログラミングの仕事が楽しく、分からないなりに仕事に没頭していた。

### 「仕事に対するポリシーそれは「信用を積み重ねる」こと」

これまで、業務システムなどの開発時に必要とされる汎用的な機能や部品を提供するフレームワークの構築に数多く関わってきた。またフレーム

例えば、アジャイル開発。アジャイル開発は短期間でリリースを繰り返すため、設計・製造・環境構築・リリースを通じた技術や知識、すなわちシステム全体を理解し実現できるスキルが必要だ。しかし、個人の能力だけでは限界がある。周囲のスペシャリストとある程度の知識を持って会話をしながら、成果を引き出し、システムを完成させるノウハウも求められる。森泉の考えるこれからの匠像がここにある。

「Sierは、お客様のDXの実現に対応できなければならない」

それを実現するために、現場のメンバーとも交わりながら、自分たちの役割や仕事の仕方を転換していくことを今目指していると言った。

### 「外“に目を向けて」

探求心が強く常に新しい技術に関心を持ち、いち早くアジャイル開発やクラウドネイティブ開発に目を向けていた。一方で、技術だけでなく幅広い分野にも目を向け勉強している。そんな匠が最近、特に取り組んでいるのが外部セミナーに参加することだ。

「若い人にも、外部セミナーに足を運ぶなど外に目を向けてほしい」

社内だけを見ていると、ロールモデルが身近な人に限られてしまいがちになる。他社のトラブルや失敗談、それらをどのように解決したのかといった外部の話や、それを聞くことで得られる知識は非常に有益だ。マーケティングに関するセミナーであっても今はどこかで技術と繋がっている。さまざまな分野ビジネスの知識が開発における要件定義や設計などの役に立つし、いろいろな気づきを与えてくれる。DX時代の対応を目指す匠は、若手が「外」に目を向けることを期待している。

### 「お客様のDXの実現に対応できなければならぬ」

森泉は、現在、所属する事業部で今後進展していくお客様のDXの実現に対応するためのノウハウやスキルをまとめる活動に取り組んでいる。

To the next stage これからもIKIをよろしくお願ひします

当社が誕生20周年を迎え、このようなパーティを開催できたのは、皆様の支えがあったことです。IKIは、これからも「すべてのステークホルダーから選ばれる会社」となることを目指してまいります。今後ともご愛顧賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

# 6 閉会



全社員の約9割が一堂に会した今回のパーティ。2時間という短い時間でしたが、社員共通の思い出となりました。IKIの更なる成長を目指し、全社員一丸となり、次の20年、30年に向かって歩み続けます。

# 5 抽選会

1等当選者と  
プレゼンターの  
安藤社長で  
記念撮影。



パーティ後半では抽選会を実施。当日まで景品内容は非公開であったため、豪華な景品の発表に会場は大いに盛り上がりました。1等当選者には、会場から大きな拍手も送られました。

# 4 メインイベント



20年分の懐かしい写真と、まだ見ぬ未来の映像を見つめる社員たち。

スペシャルゲストのTSUKEMENさん\*が全4曲を生演奏。3曲目の「時を超える絆」は、IKI20年の歴史とIKIの未来をテーマに作成した映像を背景に、演奏いただきました。素敵な演奏に会場の盛り上がりも最高潮に！

\*TSUKEMENとは…

2008年にコンサートデビュー、2010年にメジャーデビューした、TAIRIKUさん、KENTAさんのWヴァイオリンと、SUGURUさんのピアノからなるインストゥルメンタル・ユニット。マイクやスピーカーなどの音響装置を通さずに、楽器本来のもつ「生音」によるLIVEを展開しているアーティストです。

# IKI 誕生

イベントレポート

# 20周年記念パーティを開催！

To the next stage 2019年10月に、日本ナレッジインダストリーとアイエックスの統合によりアイエックス・ナレッジが誕生して20周年を迎えました。それを記念し、さる8月23日にパレスホテル東京にて「IKI誕生20周年記念パーティ」を開催しました。当社社員約1200名が参加した、パーティ当日の様子をレポートします。

# 3 歓談



林副社長の乾杯で歓談がスタート！ホテルおすすめのローストビーフには長蛇の列が。

歓談が始まるとともに、会場は談笑の声に包まれました。役員の方々や上長、久しぶりの同期など、美味しいお料理をいただきながら社員同士の会話が弾みます。

20周年スローガン表彰では、採用された栃木 和彦さんがスローガンに込めた思いを一言。



# 1 開会



12時ちょうどに会場が暗転し、IKI20年の歴史をダイジェストで振り返るオープニング映像で、パーティが開会しました！

# 2 社長挨拶

「To the next stage」に思いを込めて

安藤社長より、20周年スローガン「To the next stage」への思いを込めて、次の20年、30年を支える若い社員へ、新しいステージでの活躍を期待する挨拶がありました。キーワードは「change」と「chance」そして「challenge」。

お客さま：株式会社新潟県農協電算センター

日頃「しっかりとしたモノづくりと高品質のサービス」を標榜するIKIのサービス業務が、お客さま・ユーザーに、どのように評価されているか…。システムそのものやシステム開発のプロセス、管理運用の業務品質など、各種サービスのユーザー視点から見たその効果・成果のほどを、ユーザーの方に直接お聞きすることにしました。題して「IKIのサービスが選ばれる“わけ”」

## 長年のパートナー だからこそその 一体感が強みに



わか い いく お  
若井 郁夫さん(右)  
開発部 部長

むら やま こう じ  
村山 耕司さん(左)  
開発部 担当部長

提供サービス：システム開発

今回のお客さまは、「JA経営の安定」という設立以来の命題とともに、新たな時代に対応した事業展開を総合的に支援する、高度で効率的な「JA総合情報システム」の構築と運営を担う株式会社新潟県農協電算センターさま。インタビューに応じていただいたのは、JAグループ新潟(県下23の総合JA、その事業活動を補うJA連合会、指導機関であるJA中央会)の情報処理を担いシステム開発を担当する、開発部部長 若井郁夫さんと、同部担当部長 村山耕司さんです。

ホスト系からオープン系までの  
対応力に強み

まず、若井さんと村山さんが所属する部門の役割について教えてください。

若井..当社は社名が示すとおり、電算化による事務処理の効率化・合理化を図る「JAグループ新潟の共同利用施設」として設立されました。新潟県下のJAとそれを支える連合会の情報処理を担っています。開発部も名前のとおりでシステム開発を担当しています。開発部はプログラムがメインの仕事で、JAとの調整・ヒアリングなどを行う営業部と、作り上げたシステムを運用する運用部の中間の位置づけになります。

IKIさんには主にプログラミングをお願いしています。当社の現場に長年いる方は業務にも精通し、経験も増えていますので、SEとしても活躍していただいています。お付き合いが長いので、たとえばこの方は購買業務に詳しい、この方は管理系の業務に詳しいということが分かっています。ですので、自然と分担をしながら仕事をしていただいています。

御社とは長年お付き合いさせていただいているというお話ですが。

若井..30年くらいになると思います。当社は2010年にホスト系のシステムから全てオープン系のシステムに切り替えまし

た。IKIさんはホスト系の頃からいらっしやってプログラム開発もやっていただきました。いまIKIさんから来ていただいたら10名の中の3〜4名はそのときにはすでにいらっしやったと思います。

— そんなに長くお付き合いさせていただいているんですね。ありがとうございます。IKIにはどのようなイメージをお持ちですか。

若井..あくまでも会社の中だけの話ですが、ツーンと言えばカーミみたいな感覚の中で、お互いに心が知れているおかげで仕事がいやいやしいということがものすごくありがたいですね。一緒になって開発しているという一体感はすごく感じます。

— 具体的に評価をいただいているところがありますか。

村山..人間力はいいですね。お互いに何かしら気を使っている部分はあるにしても、普通に会話をするといいですか、意識しない会話が続けられますのでもいいのかなと思います。特に長くいらっしやる方は当社の社員のような感覚がありますね(笑)。

若井..技術面に関しても、ずいぶん頼りにしています。長年同じ業務に関わっていただいている関係もあって、業務の修正や新しい機能を開発しなければいけないときにはすごく頼りになります。

— 当社のメンバーがいると安心感があるということですか。



— 良いことばかりをお聞きしましたが、気になる点期待する点はございますか。

信頼関係の構築は  
検討の場から

若井..ありますね。当社もホスト系からオープン系のシステムに切り替えましたが、ホスト系のシステム作りといまのオープン系のシステム作りでは使うプログラミング言語もかなり違いますし、やり方も違います。その中で何事もなく同じ方が続けて担当されています。これはすごいことです。

村山..プログラミング言語だけを見ても3言語を使ったことになりました。この切り替えについていけたというところはIKIさんの強いところですね。

若井..技術的に見るとそのあたりで人の入れ替わりがあって当然だったのかなという気もしますが、それがなかったということは我々もすごく助かっていますね。

若井..引き続き仕事をしていただきたいというお願いはあります。先ほど言いましたように、現時点では頼りにしている方が大勢いらっしやいます。

当社ではパートナー会社さんを交えてグループごとにミーティングをしています。IKIの方々とは検討の場での打ち合わせがしやすいですね。それが一番助かります。当社が言うことをその通りに全て聞き入れるのではなく、ここが違うのではないか、こうしたほうがいいのではないかという話もされます。そういうところでお互いに信頼関係を築いていったのではないのでしょうか。

いまは当社の社員と同じ感覚で思うことをそのまま話していただいていますので、その部分が良いところではないかと思っています。きつと、それだけ親身になって考えていただいているのでしょうか。この業界では時期によっては非常に残業が多くなったり、トラブルが起きれば昼夜を問わず対応するということが必ずあります。休日に出ただくこともあります。IKIの方々にはそのようなときにも快くやっていただいています。我々としては甘えてはいけないということも分かっています。障害が発生したり納期が迫っています。無理をお願いせざるを得ません。IKIの方々も入れ替わりがゼロとは言えないし、我々も入れ替わりますので、その中でも培ってきた歴史や流れなどを引き継いでいただいているのは何ものにも代えがたいものだと思います。

システム開発の比重は  
業務系から情報系へ

—— 大きなシステム障害が発生したという経験はございますか。

若井… 大昔の昭和の時代は全面的にオンラインが止まってしまったということがありました。しかし、信用系が二極集中のシステムに移行し、当社のメインの開発が経済系や管理系になってからは、そこまで大きなトラブルはなかったですね。

システムがうまく動かないということがほとんどの障害の発端になりますので、要はシステム開発をした我々が障害の引き金になっているわけですね。当然ですが、システム開発を担当した我々が対応の中心になることが圧倒的に多いです。障害発生というところが非常に苦い体験でしたが、私も年をとったせいか、あのときががんばったな、あのときみんなで協力して寝ずにやったよな、というのがひよっとしたらいい思い出なかもしれないと思うこともありますね(笑)。  
村山… 時間が経ったからそう言えるのかもかもしれません。当時、当社がご迷惑をおかけしたところから見ればだいぶ怒られるような話だろうと思います(笑)。



—— 今後の仕事内容や方向性などについて差し支えない範囲でお聞かせください。

若井… どの会社にとっても業務系のシステム開発は非常に大きなウエートを占めていると思います。10月1日から実施される予定の消費増税のような制度改定などがあれば大きな修正が必要になります。

当社も引き続き業務系のシステム開発は行っていきますが、情報系のシステム開発にも比重を置くようになるのではないかと考えています。

アイディアを出しながら  
末永いお付き合いを

—— では、IKIにかかわらずパートナー会社に期待したいことは何かございますか。

若井… これからも現在の仕事をプロパー社員だけですべて賄うことは100%ないと思います。ですからパートナー会社さんにはこれからお世話になりたいと考えています。ただ、これまでもあるときは極端に忙しくなって、またあるときは少し緩くなるという部分がありました。例えばいまIKIさんからは10名の方に来ていただいています。来年から7名に、3年後にはひょっとしたらゼロになるかもしれません。その可能性がないとは言いませんが、お互いに融通をきかせながらアイディアを出しながらまだまだ長いお付き合いをさせていただけるとありがたいですね。

—— 人材などの面では何かご要望はございますか。

村山… オープン系の開発になりますとインフラ関係といいますが、ネットワークに関する知識もある程度あるといいですね。トータル的にいろいろな知識があるといいと、かねがね思っています。

若井… そのとおりですが、我々のかなり身勝手な要望です(笑)。私自身はホスト系の開発に長く携わってきました。オープン系の開発に変わったときに、当社の体制を見るとオープン系の開発に必要な人材が少し抜け落ちていました。その部分をどう補ってきたのかというと、それはまさにパートナー会社さんの力を借りてやってきたということですね。

—— これからもご要望にお応えできそうな体制を組んでいきたいと思っています。では、仕事に関するお話はここまでとして、当社の社員と休日と一緒に過ごす、あるいは飲み会をするなどのコミュニケーションは何かございますか。

若井… ある程度計画を立てた上ですが、パートナー会社の皆さんにも来ていただいてグループ単位で春夏秋冬、最低でも年に4回くらい飲み会をしています。

村山… それに加えて送別会や歓迎会もありますね。我々の若いときは休日を一緒に過ごすこともありましたが、いまの若い人たちは昭和の時代とは違うと思います(笑)。

—— 今日はどうもありがとうございました。

column

グローバルな波に乗って

清水 寛

8 年ほど前に、知人の紹介でベルギーにあるインターナショナルスクールの前で子供の送り迎えに来ている2人の女性に出会った。異国の地で日本人に会うと、なぜか親しみが湧いてきて故郷のことだとかここに住むことになった事情などで話が盛り上がり、たった20分の間だったが小さなコミュニケーションができてしまった。旅行者である私と妻は子供たちが下校してくるのを待ち、日本に帰国した際の再会を約束して彼女たちと別れた。

それから数年後、別れる際にあいさつ程度に交換したメールアドレスから彼女たちと再会することができた。Aさん。彼女とは東京のおでん屋でお酒を飲みながら家族同士で再会を祝した。彼女は、お茶、お花、琴を勉強し、和服を着て日本に来る外国人に日本の文化を紹介する活動をしているのだという。最近では東南アジアに「出張」して同じようにお茶を点てたり琴を披露したりしながら現地の人たちに日本の良さを伝えている。このようにして年に数回は自宅に招待したり、外国では現地の人の家にお邪魔したりしながら外国人との交流が続いている。和服の似合う淑

やかで素敵な女性のどこにそのようなパワーが秘められているのか不思議に思っていました。Bさん。彼女とはスペインのマドリッドで再会した。マドリッドの人たちが普段好んで行くレストランや雑貨店などを紹介してもらった後、ポティンという店で名物の子豚の丸焼きとワインをいただきながらいろいろな話をさせていただいた。彼女は、西洋の教会の独特な雰囲気や歴史に裏付けられた奥深さに魅せられ、ある先生に師事しながらキリスト教を学術的に研究し、その傍らでスペイン人に日本語を教えているという。スペインで過ごしているうちに社会や文化も好きになり、生涯をこの地で過ごすつもりだと熱く語っていたのが印象的だった。

ビジネスの中では、グローバルな人材を育て経済の競争力を高めていこうと企業の間で行われている。外国に行くと活躍するばかりでなく、外国人の労働者を受け入れたり、観光客を日本に呼び込むことにより、国内の産業を活性化しようとする動きも盛んになっている。また、業界でもDXで

お客様のシステム構築に携わっていく中で、海外と繋がる機会が増えてくるものと思われる。このような中で、グローバル人材として活躍するためには、語学力、コミュニケーション能力、専門性など、いろいろな要件が必要といわれているが、本質的には、自国の文化を大切にしてその価値観をきちんと持つことと、柔軟な思考で異文化を理解し行動を共にしていくことが大切だと思う。

2 人の女性はビジネスとして活動をしているわけではないが、彼女たちに共通して言えることは、自分が育ってきた文化に誇りを持ち、これを大事にしながら異なる思想や文化を持つ人々を理解するために、彼らの懐に深く入り込み生活を共にする時間を大切にしていることである。まさしくグローバルという波を上手に乗りこなしているように思える。住む場所や話す言葉が違えば考え方や文化も違ってくることを当然のこととして受け止めていて、自分の生活空間から一歩踏み出して活動することを信条とし実行している姿に逞しさを感ずる。彼女たちは私に刺激を与えてくれる尊敬できる友人である。

(顧問)